

<動向>

2018 年度人権教育研究室第 1 回公開研究会 『『ブラック企業』の実態と働く者の人権』開催報告

阿 部 潔

2018 年 10 月 29 日（月）16 時 50 分から 19 時にかけて、関西学院大学図書館ホールにて映画監督の土屋トカチ氏を招いて人権教育研究室が主催する第 1 回公開研究会『『ブラック企業』の実態と働く者の人権』を開催した。当日の参加者は約 80 名であった。

土屋氏からの挨拶の後、同氏が製作・監督した作品『フツの仕事をしたい』の映画上映を行なった。同作品は、運送業界におけるひとつの事例／事件を追ったものである。一人の若い運転手が自らの過酷な労働環境に疑問を持ち、労働組合員となって所属会社と交渉しようとするものの社長や上司からの不当な介入や暴力に見舞われ窮地に陥る。だが、不屈の意思と組合員や家族の支援のもとで闘争を続け、最後には自分が好きなドライバーという仕事への復帰を果たす。その一連の過程に密着したドキュメンタリー作品を、土屋監督は自らによるナレーションを交えて作り上げた。

映画を観た者がまずなによりも驚かされるのは、生々しい映像と音声によって伝えられる「会社側の人々」による組合員への威嚇や恫喝の凄まじさであろう。彼らは主人公の青年ドライバーの母親の葬儀会場にまで乗り込み、会社への訴えを取り下げるよう執拗に迫る。その姿は、ヤクザ映画に出てくるチンピラの振る舞いそのものに見える。常軌を逸したとしか形容しようのない彼らの度重なる脅しにさらされながらも、青年は最後まで挫けることはなかった。その理由は、映画の中

で本人も振り返るように彼を支援する労働組合と仲間・家族がいたからであろう。

運送業界におけるひとつの事例／事件を通して浮かび上がってくるのは、現在の日本社会における「ブラック企業」の実態にほかならない。労働条件を規制する法律を無視し、働く者の人権をないがしろにすることがあたりまえに繰り返される職場は、多くの人の日常感覚に照らせばきわめて異様なものに映ることだろう。だが忘れてならないのは、こうした「働く日常」は、実のところ当事者たちにごくあたりまえ＝「フツ」として受けとめられているという事実である。ドライバーの青年自身も映画の中で、何週間にもわたりろくに休みが取れないほどの厳しい労働環境や会社による賃金搾取がまかり通っていた当時の状況を振り返りながら、その時はそれが「フツ」だと感じていたと語っている。はたから見れば「おかしいこと」であっても、その内部・内輪にとっては「あたりまえ」であるからこそ、現在さまざまな業界・企業で「ブラックな働き／働かせ方」がまかり通ってしまうのである。

淡々と映し出される映像は、そうした「フツ」のただ中にいた青年が、労働組合との出会いをキッカケとして働く者の権利に目覚め、自ら声を上げ不正をくり返す企業と対峙するにいたる姿を克明に描き出していく。やがて彼は、支援してくれる人たちとの関わりを通して、自分一人だけでなく同じような境遇に置かれたほかの労働者＝仲

間たちのために、苦しい状況に見舞われても諦めることなく不当な労働条件・環境に対して異議申し立てを続け、最後に「勝利」を勝ち取るのである。だが、その道のりは決して容易なものではなかった。彼の身を案じて続いていた母親は、急死してしまう。彼自身も度重なる嫌がらせを受け極度のストレスに曝されたあげく、体調を崩し緊急入院に追いやられる。手術後、ようやく回復しつつある病床で土屋監督からのインタビューを受ける中、彼はある言葉を口にする。「フツの仕事がしたい。」

このひと言からは、かつての「フツ」とは大きく意味を異にする、彼自身が人権をめぐる闘争の中で考え/感じるようになった「フツ」への願いが痛いほどに伝わってくる。

日々の生活の中で「フツ」に働くことのかげがえのなさと同時に、それがきわめて困難な現代日本の労働をめぐる現実。長期にわたる疲労・心労と緊急手術の影響でやせ細ってしまった青年の身体を捉えた映像は、そのことを静かに物語る。

今日の「ブラック企業」の実態とそれに闘いを挑んだ人々の姿を当事者視線で描いた本作品を前にして私たち一人ひとは、現代日本で「フツに働く」ことを取り巻く厳しい現実に、自分はどうのように向き合うのかという重い課題を突きつけられる。

映画上映後、土屋監督から本作の製作に至る経緯や主人公の青年をはじめとする関係者たちの「その後」について解説がなされた。そこからは土屋氏自らがかつて不当解雇された経験を持ち、そのことが本作品に取り組む動機のひとつとなっていることがうかがわれた。

その後、フロアとの質疑応答が活発に行なわれ、組合によるストライキの様子をはじめ目にした学生からは労働組合とはそもそもなに／だれなのかとの問いが投げかけられ、また就活を控えた学生からはどうして多くの企業は「ブラック」になりがちなのかとの不安と戸惑いが土屋監督に

吐露された。土屋氏からは、これまでの自らの経験や体験を踏まえながら「ブラック企業」に立ち向かううえで、働く者一人ひとりが人権意識をしっかりと持つと同時に、それを守るために互いに支え合い、共に闘う「組合／ユニオン」がいかに重要な存在であるかが語られた。

現在の日本社会において「ブラック企業」の問題は、だれにとっても他人事ではない。今回の映画上映とトークセッションを通して、これから「働く世界」に出て行く学生たちが「ブラック企業」の問題について知る／考える機会を得たことは、大学での人権教育への取り組みという点で大きな意義があったと言える。大学において人権教育に携わる私たちは、「フツの仕事がしたい」との学生たちの願いが文字通り普通に実現される日が来るまで、実社会の動向を注視しながらあらゆる機会に声を上げ続けなければならない。